

カトカラの舞う夜更け

新里達也

3年前の梅雨の最中にタケゾウが死んでからというもの、私はカトカラを集めるようになった。あの夏以来、カミキリムシの採集にはほとんど行っていない。恒例にしていた初夏の台湾行きも、6～9月のカトカラシーズンと重なることを口実に、仲間の誘いを断っている。たとえ収集趣味の世界であろうが、甲虫屋がレピ屋に転向をするのはよほどの事情というのが虫屋一般の見識である。きっかけは長年連れ添った愛犬の死であることは間違いないが、その因果関係が何であるのか、未だ自分で説明できないままだ。

高桑さんが旅立った翌日は奥飛騨に出かけた。何も急に思い立ったわけではなく、半月も前から予定していたのである。友人の西山明さんが、8月上旬にとある沢筋に仕掛けた設置式ライトトラップでミヤマキシタバを5つ採ってきた。その実績をたよりに直々の案内のもとに出かけたのである。西山さんはカミキリ屋だが、この3年もの間、私の気まぐれにいつも付き合ってくれる奇人な人である。ミヤマキシタバは、私の自己未採集のカトカラ3種のうちのひとつで、これまで2回挑戦していずれも苦杯を舐めている。

昨日の今日のことで、さすがにこの採集行は中止しようと思った。逝去の知らせを受けた直後に西山さんに電話をかけ、事情を説明していったんは止めようと思った。その後、仕事に戻るつもりでパソコンを開いてみたものの、こんな状態では何もできるはずがない。高桑さんがもうこの世にいないと思うと、深い悲しみが堰を切ったように押し寄せてきた。持ち堪えても1週間あまりという告知を受けていたが、それは何かの聞き違いだと記憶から抹殺していたから、私には突然にして惨い現実がやってきたのである。もっとも頭で理解していても、覚悟などできる話ではないだろう。

そんな事情にもかかわらず、結局のところ翌8月26日、私たちは奥飛騨の沢筋にいた。日暮れにはまだだいぶ早い午後のことである。見上げると、空高く雲が勢いよく流れ、その合間から薄日が差している。これから天候が急変するのかもしれない。そんな予兆が感じられた。

県道から未舗装の道路に折れてほどなく、杉林に囲まれた空き地に行き当たる。そこが車止めで、さらに10分ばかり歩いて降りたところが件のポイントである。今宵そこで灯火採集をやれば、目的のものはまず間違いなく飛来するはずなのだ。

しかし、下見を兼ねて訪れたポイントの環境を見たとなん、私は落胆の気持ちを禁じえなかった。

「こんな見通しの悪い林床で灯火採集もないだろう」

おそらく傍目にも不愉快そうな顔で、そう言ったのだと思う。

ミヤマキシタバの食餌植物であるハンノキ類が優占する溪畔林であるその場所は、V字谷の狭小な谷底近くに位置している。開けた空間はまったくないばかりか、灯火採集の白幕を張る場所さえ確保が難しい。にわか蛾屋になって知りえたことだが、蛾と甲虫では灯火採集のやり方がだいぶ違っている。小型の甲虫であれば閉鎖的な空間でも結構な虫の数が飛来することもあるが、蛾の多くではそれが通用しないのである。ましてカトカラポイントとしては、その場所はもはや絶望的な立地に思えた。

とはいえ、奥飛騨限界まで遠征してきて、まったく実績のない場所で白幕を張る勇気も持ち合わせていなかった。二人とも蛾は素人さんだから、こういったときの機転が利かないのである。納得できないながらも、当初の予定通りにするほかはなく、暗い林床に野営テントに寄り添う形で、灯火採集道具一式を併設した。この日の日没は午後6時半、月が昇るのは日付の変わる深夜である。予報によれば夜半から雨になるらしい。

点灯して間もなくミヤマキシタバが飛来した。少し呆気ないような登場であった。まだ薄暮の時間帯だったから、ヒラヒラと舞い降りてきたその姿を確認することができた。白幕の裏側に回り込んで気を揉まされたが、やがてそれは三角形の黒い影となった。素早く駆け寄り回収。まずは目的を遂げることができた。

缶ビールを掲げて「乾杯」と言いかけて、「献杯」と言い直した。殺生をしておいて献杯もないだろうが、それが虫捕りを生きざまに重ねる虫屋というものである。いつもは虫屋の論理というものがある嫌いな私だが、今日ばかりは理不尽な気持ちを前面に押し出した気分だった。この数週間ばかり、心が折れて何もかもが面白くなかった。

いつの間にか雨が降っていた。闇の中の雨が意外に気にさわらないことを初めて知った。雨合羽を着込んで、ウイスキーの水割りに切り替える。

高桑さんが急逝した背景を知らない西山さんに、この一月の出来事を問わず語りで聞かせた。

先月末にもらったご本人からのメールでは、「検

査入院になるが、結果によってはそのまましばらく病院生活なるかもしれない」ということだった。癌という病名は秘めた噂ほどに近い間で共有されていたが、それが現実になるとは誰も思っていなかった。たとえ現実であっても快方に向かうものと信じていた。それから半月あまりが過ぎたが、本人に連絡をしてよいものかどうか躊躇しているうちに、容態が急変したのである。

ブナ帯の常連であるゴマシオキシタバが一つ飛来した。やけに古びた個体だった。続いてエゾシロシタバが来たが、これは蛾屋さんがいうドンボロであった。だいぶしてから新鮮なシロシタバが一つ来た。

カトカラは夜半過ぎに多く飛来する。月齢や気象条件にもよるが、だいたい9時過ぎから飛来のピークを迎え、条件が良ければ2時半くらいまでそれが間断をおきながら続く。しかし、悪いときは10時頃に終わってしまうこともある。とりわけミヤマキシタバは深夜型で、普通は0時を過ぎてからの飛来である。ただ稀に早い時間帯に来ることもあるが、その場合は雌であることが多い。この方面の大家である石塚勝巳さんがそう教えてくれた。たしかに、薄暮時に飛来した個体を帰宅後に調べてみたら、正しく雌であった。

約束の9時を過ぎても、飛来はなお芳しくなかった。カトカラは時をおいて一つずつ現れるものの、そもそも蛾自体があまり飛んでこないのである。立地に問題ありは端から承知しているが、気象条件も悪いのだろう。いつ見ても白幕にはトビケラやユスリカなどが点々と付いているばかりであった。

オニベニシタバが来た。むろん期待していたのではない。こんな普通種が夜更けになってようやく飛来することが、今宵の劣勢を物語っている。キシタバが続けて来た。このときまで飛来したカトカラ6種すべてが1個体ずつという異常さであった。

高桑さんと最後に会ったのは亡くなる6日前のことである。病室のベッドに伏して幾本もの点滴の管がつながる姿を見たら、もはや精いっぱい笑顔と饒舌をつくるほかになかった。高桑さんは見舞いに来た私たちに向かってしきりに恐縮がっていた。

「今年は全国どこでもカトカラが不作ですね」

私はどうでもよい話を振った。もっとまじな話

題であってよいはずだが、思い浮かばなかった。

「またまた。それは新里だけの話じゃないの？」

隣にいた秋山秀雄さんが間髪入れずに突っ込むと、高桑さんに笑顔に戻った。笑うとまさに破顔となるあの笑顔は、このときはまだ健在であった。

ご様子を気遣い40分ほどの短い面会で暇をした。別れ際に力強い握手をしていただいたが、いま振り返ってみれば、高桑さんと握手をしたのはこれが初めて最後のことであった。

日付が変わる頃になると、雨足が一段と激しくなってきた。水滴が樹上の葉を叩くため、谷川のせせらぎの音を打ち消していた。いよいよミヤマキシタバの出動時刻となったが、期待がもてる状況にないことはわかっていた。夕方から飲み続けていた酒で酔いもだいぶ回り、その気だるさもあって私はすっかり厭戦気分になっていた。

見舞い先の話の蒸し返すようだが、今年はどこへ行ってもカトカラが採れなかった。5月の連休から8月上旬にかけて、奄美大島、大台ヶ原、屋久島、伊豆半島、久住高原、島々谷を巡ってきたもののほぼ完敗という有様だった。新里はドツボに嵌ったと、蛾類学会会長の岸田泰則さんがあちこちで吹聴していたらしい。

高桑さんは、私のことを虫捕りが下手だとよく馬鹿にした。半ば強引にそのイメージを虫屋仲間に広めようとしていたところもある。高桑さんに比べたら私は下手かもしれないが、もっと下手な連中はいくらでもいると抵抗を試みたが、薄笑いとともにあっさり却下されるのがいつものことだった。そういう戯れももうできないと思うと、さびしいものである。

未明にベニシタバが飛来したが、だいぶ飛び古した個体だった。しかもそれを潮に、沢筋のハンノキ林は完全に沈黙してしまった。いくら待っても、もう何も飛んでは来なかった。いつの間にか雨は小降りになっていて、辺り一面に深い霧が立ち込めていた。ヘッドライトの灯りで照らしてみたが、その向こうには谷底の深い闇が続くばかりであった。

(株式会社 環境指標生物)